

奈良坊目拙解卷第二

○樽井町

一作足井亦作垂井

旅籠屋町也驛宿南都馬次所

當名則有樽井於南側人家間仍為名然樽

井異說多矣

○樽井

深一丈計徑一間余井底有大石

里諺云弘仁年弘法大師始穿橋本微井為

闕伽井猶不足法水於此亦堀斯井足于法

用供濯故名足井矣

復一說曰南円堂中央有神水即通于此井

ならほうもくせつかい
奈良坊目拙解

村井勝九郎(古道)自筆

15卷14冊

享保20(1735)年

縦24.2cm 横17.2cm

本書は三百年近く前に書かれた奈良の地誌です。町ごとに詳細な記述がなされ、現在の奈良と比べてみると、小さな町にも連綿と続く歴史があることが感じられる書となっています。

例えば公納堂町は『かつて禅定院の公納所があった場所が町会所となっていて、阿弥陀仏像一体を本仏としている』と記されています。現在この町は、カフェや雑貨屋などが並び、観光客に人気の場所になっていますが、阿弥陀仏は今も祀られています。場所こそ隣の興善寺に移されましたが、一昨年までは月に一度公納堂町の住民が集って読経し、七月十五日には「阿

○公納堂町

當名性古禪定院公納所在於當町北側東端仍為名至
 ●手勝相承記曰禪定院在左京四條三坊元真手東當寺別院号飛鳥坊云云
 又云南四條以限也云云 四條大路即公納堂町是也性古公納堂舊跡存而為町會坊有本尊阿弥陀佛像一軀稱當性本佛焉
 ○續日本紀曰元真寺道昭和尚天皇四年物化後遷都平城也尚及笄子等奈

弥陀さんのおまつり」を行いました。昨年、古くなった御堂が新たに建て直されました。

興善寺についても、古老の話として記され、「十輪院境内に創建された寺で、当初は門も無く「奥ノ寺」と呼ばれていた。十輪院所縁の魚養塚が境内にあった為、十輪院と土地を交換して、南門を開いた。後、本堂を建て

た際に福智院町に北門を開いた』とあります。かくして南北に通る抜けが可能になった同寺は、現在近隣住民から「底抜け寺」と通称されています。

掲出書は、奈良の町人村井勝九郎（古道）が三十年にわたり俗諺百老の伝説等を問い尋ねて著した自筆稿本。江戸時代、他の地誌の随所に引用され、現代の観光案内にも影響を与えています。

（天理図書館 近江めぐり）